

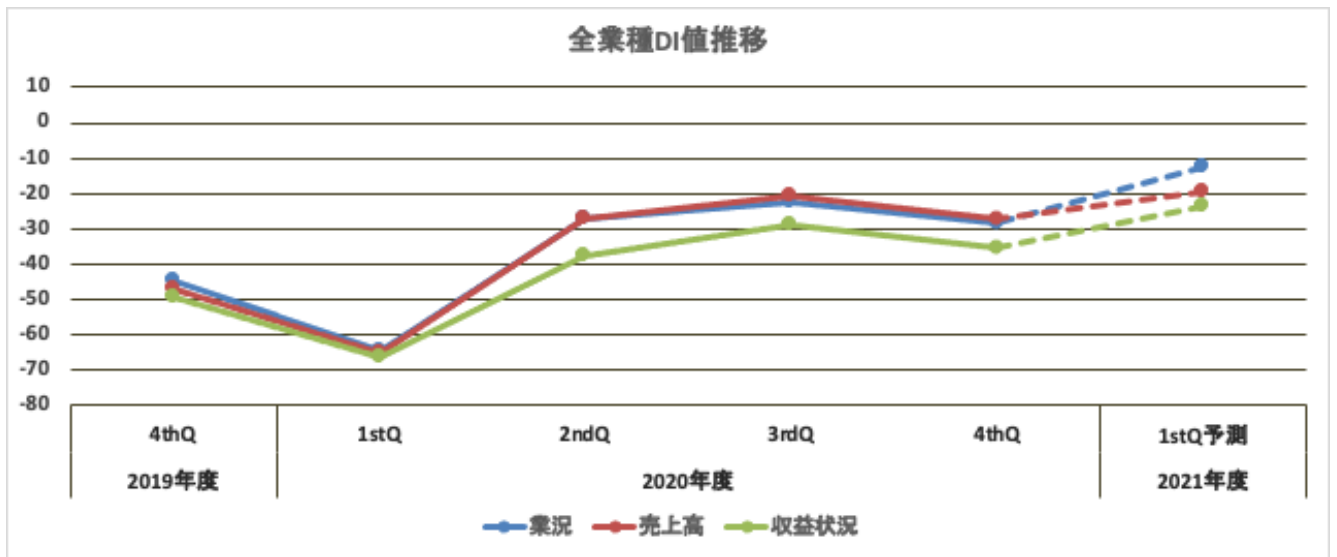
厚木商工会議所 2020年度(令和2年度)中小企業景気動向調査報告書 ＜2020年度を振り返って＞

厚木商工会議所では、厚木市内の中小企業を各業種(製造業、建設業、運輸業、小売業、飲食業、卸売業、不動産業、サービス業の8業種)から無作為に抽出した会員へ四半期ごとに年4回のはがきとweb方式によりアンケート調査を実施してきた。そこで令和2年度分(2020年度第1四半期～第4四半期)の年間結果を中心にまとめてみる。

なお、調査対象企業数ははがきとweb回答併せて300～400社の協力を得た。

今回の経過グラフは、該当業種と厚木市全業種、日商LABO調査全国平均を並べ関連性の参考とした。

1、全業種(上記厚木市内8業種の総合DI値)

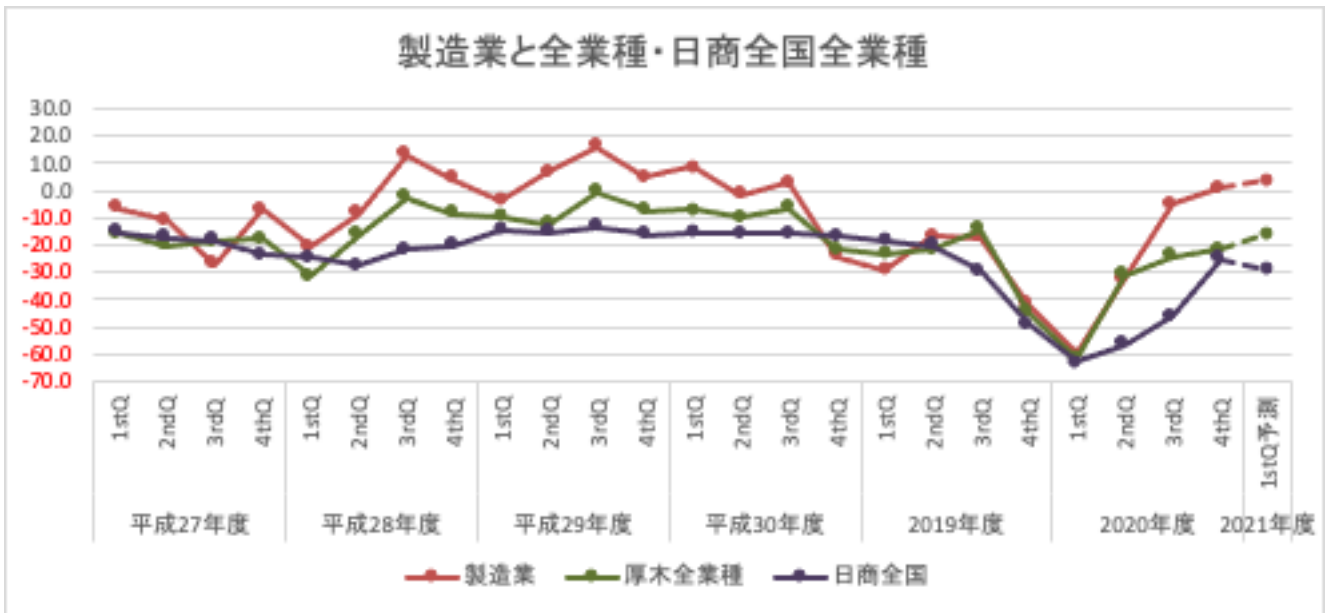


全8業種を総合すると、業況・売上高・収益状況の3要素から見てきたのは、ある程度順調に推移した第3四半期から、新型コロナウイルスの影響で第4四半期に低下が見られ、その影響は次期まで続かないのではとの予測である。日本商工会議所のLABO調査でも同様の傾向が示されており、改善の期待があるのではとの感が見られる。

以下のページには、業種別の経過と予測を31年(2019年)度だけでなく、調査を開始した27年度から6年間の傾向を出してみた。

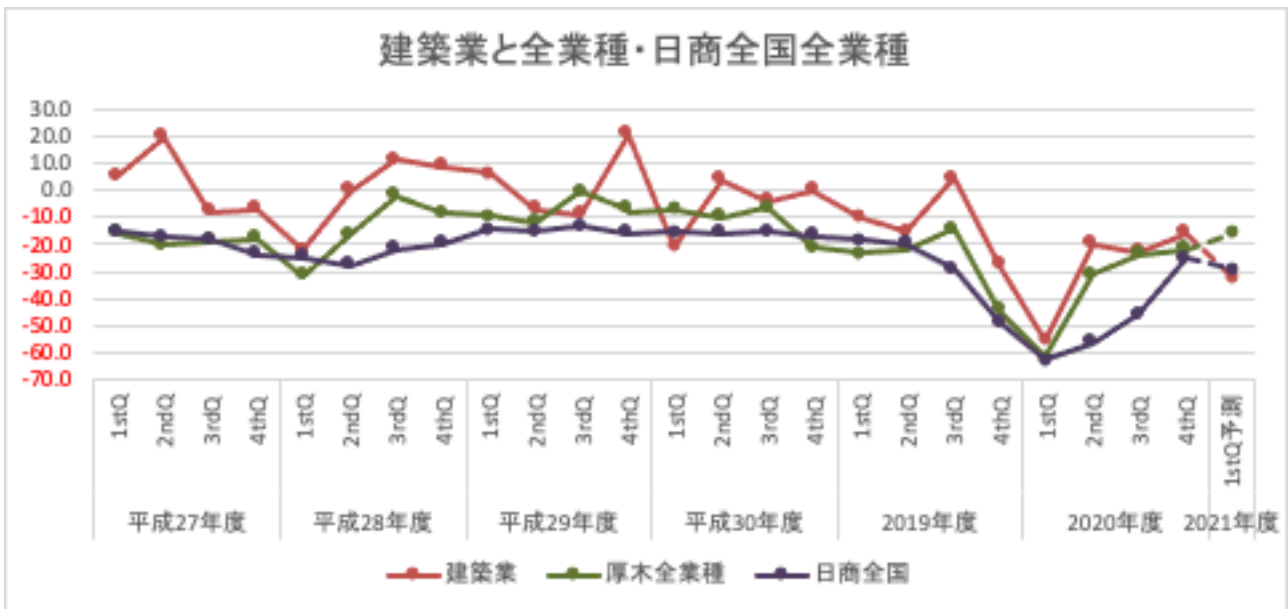
(各グラフは業種別平成27年(2015年度)から30年度(2020年度)、2021年度の業況DIおよび業況予測DI値を示す)

1) 製造業



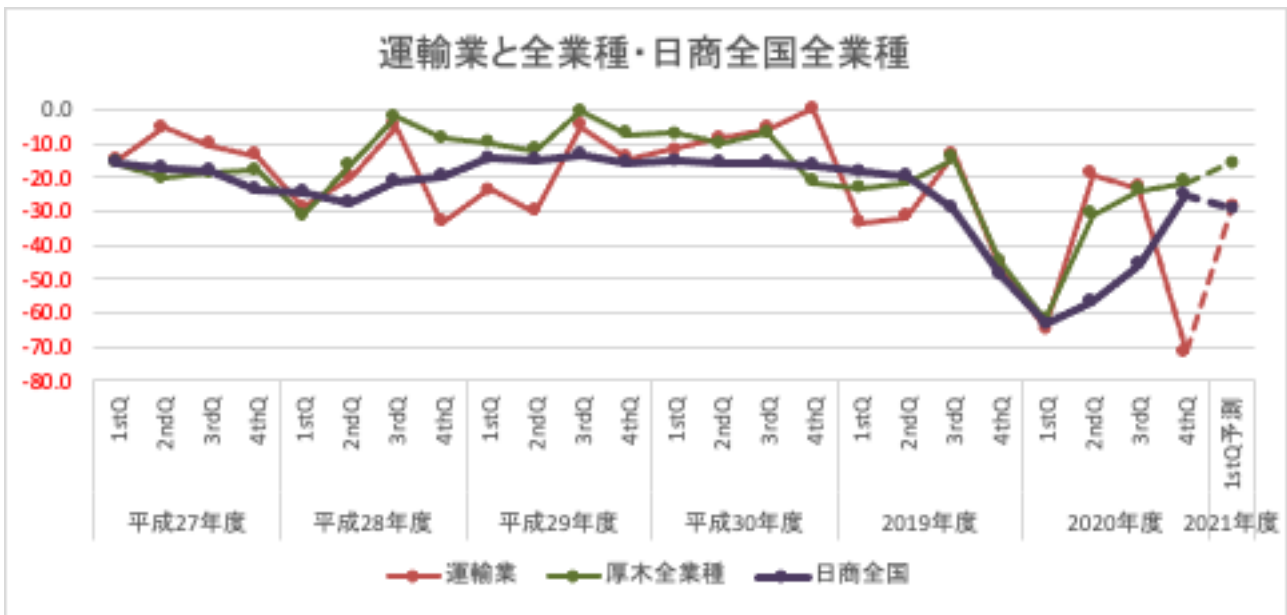
厚木市全業種及び製造業は、2019年度の第3四半期では日商全国の全業種に比べ、15ポイント以上の優位性を見せていたが、第4四半期は未知のウイルスの恐怖により見られる落ち込みがあり、2020年度の第1四半期は現実な影響を受け、下落率は日商全国より顕著となっている。その後、第2四半期では日商全国の動きに対し、急激な回復を見せ、第3四半期では製造業はさらなる回復を示している。DI値の独特な測定法のため、従来の傾向から厚木市の製造業のもつ特異性とみることができ、掘り下げが必要と思われる。

2) 建設業



27年度の好況感が28年度に入り一時停滞したが後半に持ち直しており、30年度から2019年度へ継続している。次期にも期待感はあるが、慎重な見方であろうか。厚木市内の企業平均と比較しても景気は良かった業種とみたい。さらに全国平均と比較しても、業況はよさそうで、この好況感を2021年度も維持できるか、下降傾向予測が気になる。考えられる大きな弊害はコロナの影響への不安であろう。

3) 運輸業

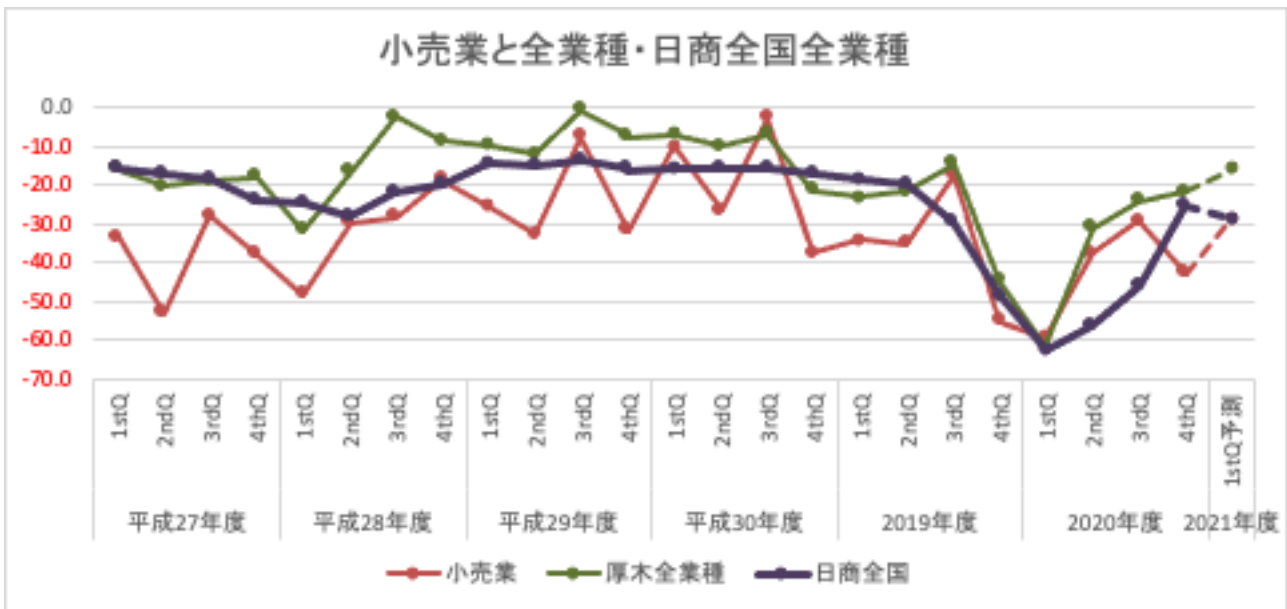


例年、低迷、好転の変動幅は大きい。特に、2019年度第3四半期から2020年度第1四半期にかけての落ち込みは大きい。厚木全業種、日商全国とも同様の傾向を示している。これは、「新型コロナウイルス」感染の影響による経済活動の低迷によるものであろう。

ところが、2020年度第2四半期においては、厚木全業種ともども急激に好転している。この要因は、コロナ感染のなかでも、一時、人・商品の動きが活発になったことによるものであろう。それも一時のことで、2020年度第4四半期にあっては再び悪化し、それが今に至っている。

運輸業の場合、収集するサンプル数が少ないので、DI値は大きく振れがちである。

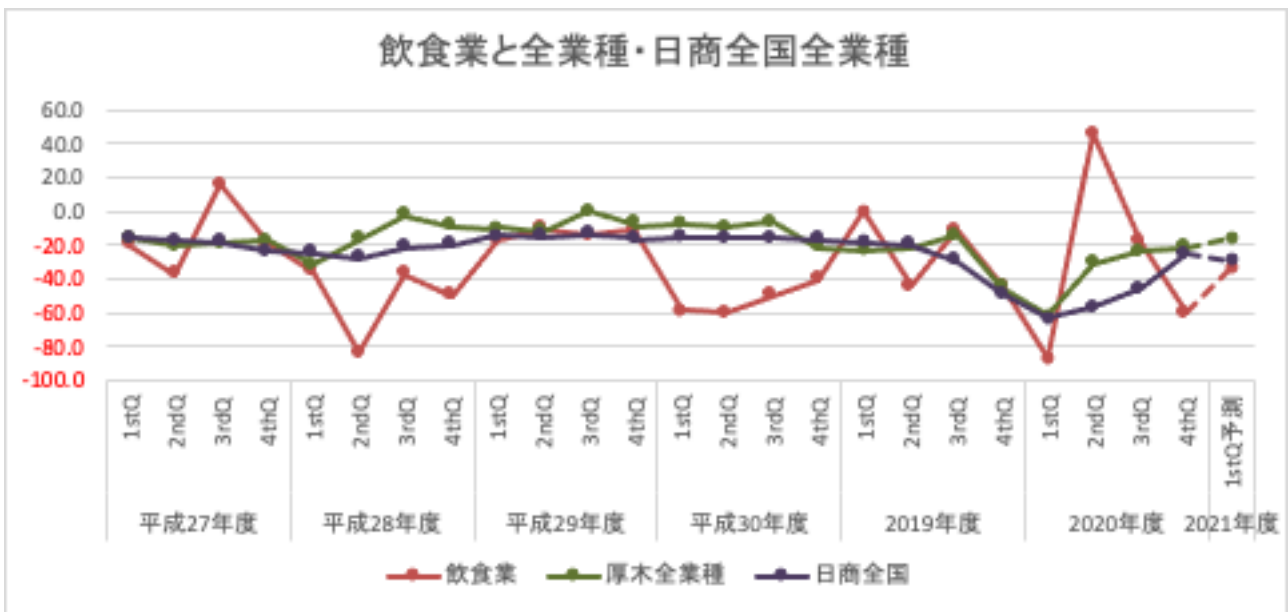
4) 小売業



コロナ禍による昨年度の第1四半期の落ち込み後、基本的には回復基調にあったと言える。しかしながら、年末年始の人流増加による第3波の影響で第4四半期に悪化を示した。2021年度第1四半期は再び回復を予想しているが、調査後の第4波の到来で予測は大きく外れそうな勢いではないだろうか。

日商全国との比較では落ち込み後の回復が早い傾向にあったが、年度末にはほぼ並んでしまっている。今年度の傾向を見ると、コロナ禍が収束を見せれば、早期の回復は望めそうである。

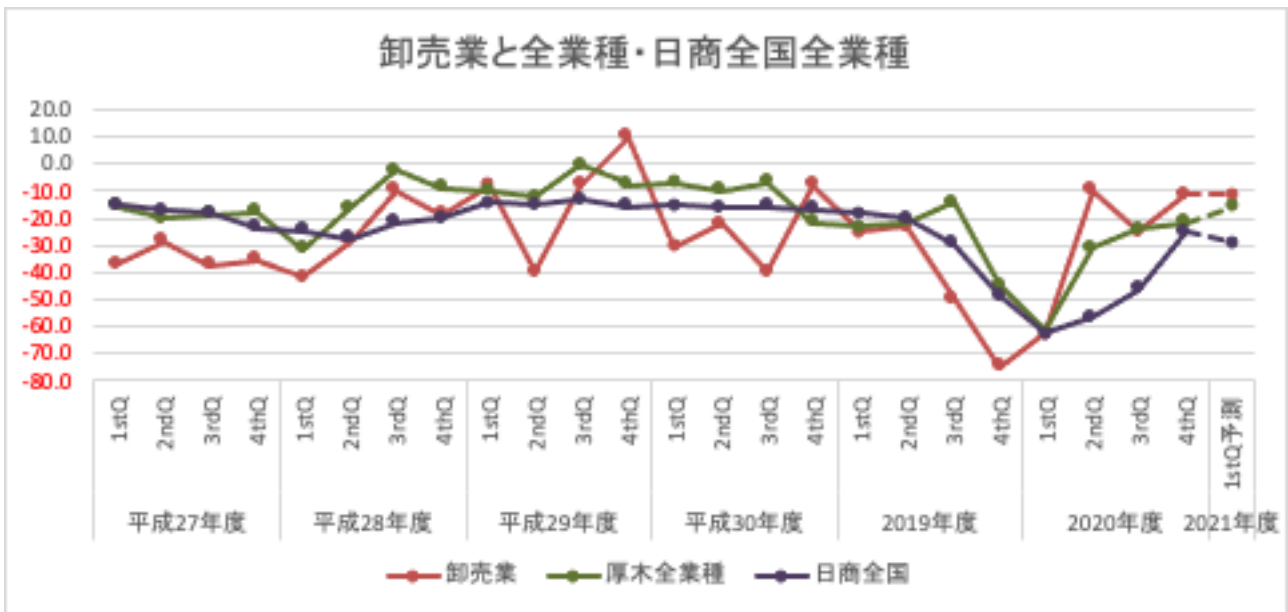
5) 飲食業



アンケート回答数が少なく、厚木全業種や日商全国に比較し変動の大きな飲食業である。1年間の傾向としては、最初の緊急事態宣言で落ち込んだ景況感が、第2・四半期に回復したところを第2波・第3波が襲い、2021年度にはようやく多少の回復を見込んでいると、解釈することができるのではないだろうか。

ただし、第4四半期の調査後に第4波が襲っているため、この回復予想は再び覆される可能性が高い。回復余力のあるうちにコロナ禍が収まってくれることを望むばかりである。

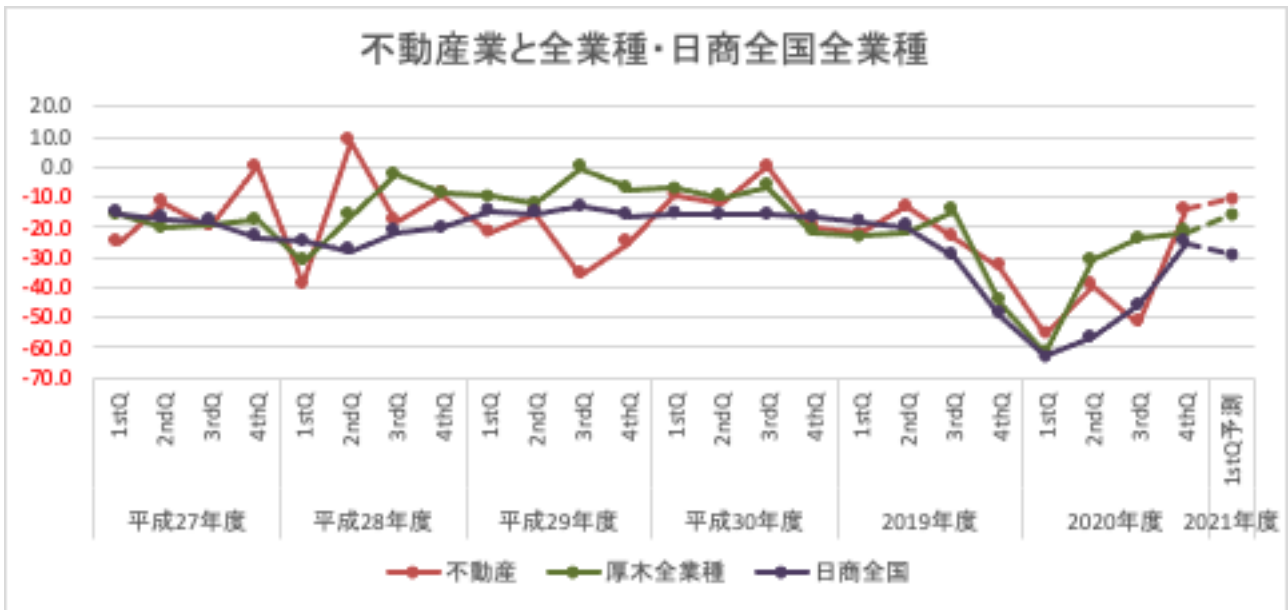
6) 卸売業



平成27年度の卸売業の業況は低めであったが、28年度に回復し、29年度には一度の改善が見られたが、30年度～2019年度へ横這いが続いた。その後は低調な動きとなっている。厚木市全体の動きや全国平均より低下の傾向が見られ先々の不安が大きいのではないかと。

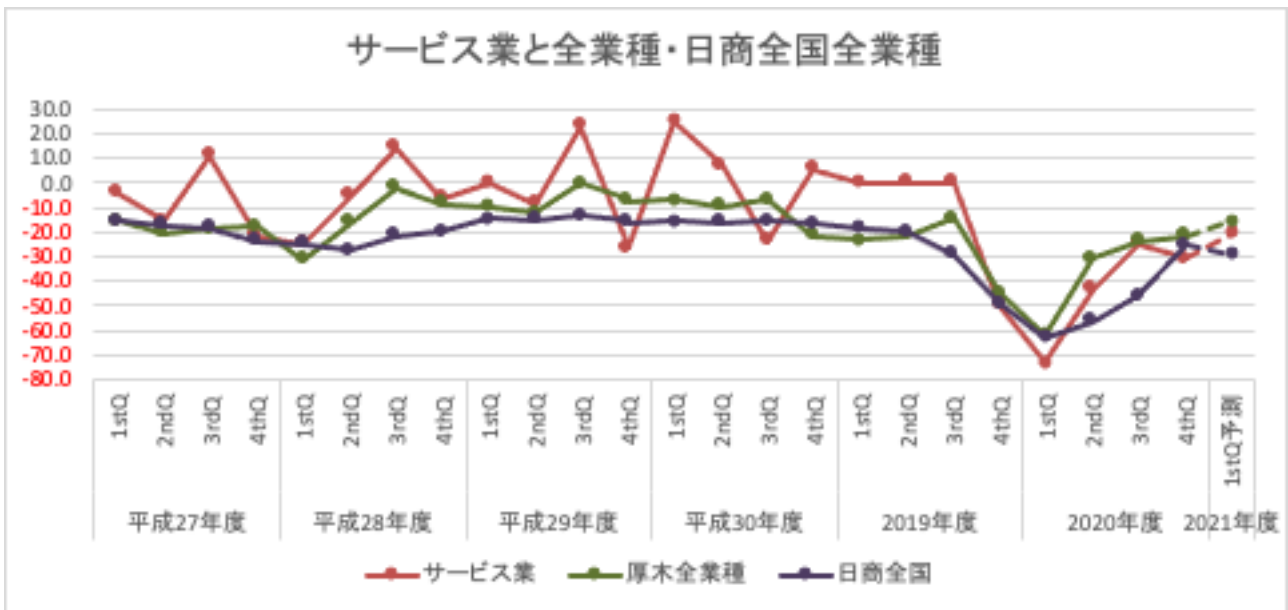
今後については、新型コロナウイルスによる影響を不安視しているものと思われ、日本の経済も先が読めない状況をどのように捉えていくかが大きく問われる時期であろう。

7) 不動産業



厚木市の不動産業は、コロナ禍でありながら2019年度第4四半期は厚木の全業種より15ポイント程度の楽観的なDI値を示している。2020年度第1四半期のDI値は大幅な下落を示しているものの、厚木市全業種および日商全国に比べ5ポイント以上の優位性を保っている。日商全国では第2四半期から第4四半期にかけて急激な回復を示しているが、厚木の不動産業は、その間乱高下を示すが、第4四半期においては厚木全業種より高いDI値を示し、2021年度第1四半期の予測も楽観傾向を示しており、予測通りであることを望みたい。

8) サービス業



全体的に、低迷、好転の変動傾向は厚木全業種・日商全国の変動傾向と類似している。しかし変動幅は大きい。大きいことの要因は、当業種の調査回答企業には宿泊業、理・美容業が多いので、集客の季節変動による影響があり、それと回答企業数が少ないことによりDI値が大きく振れることによる。

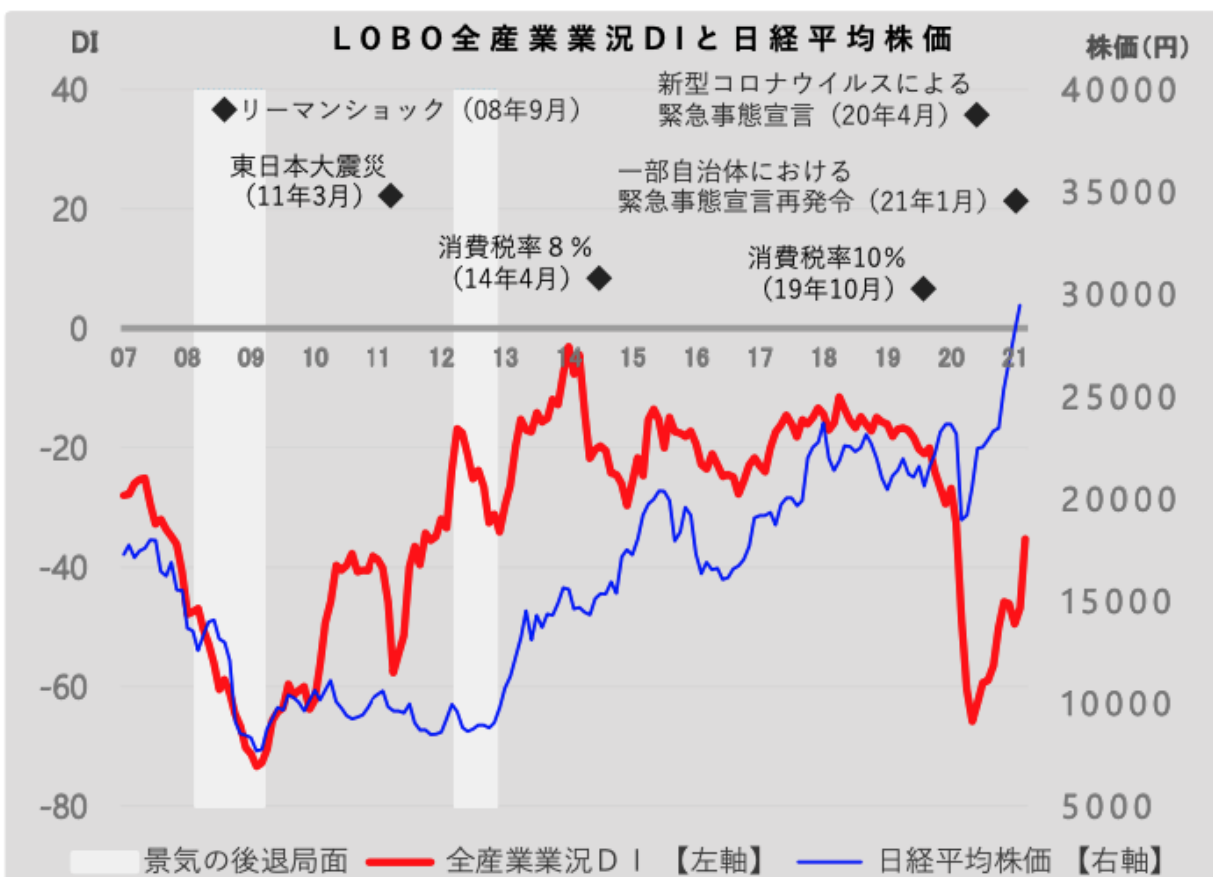
2019年度第3四半期から2020年度第1四半期にかけて大きく落ち込んでいるのは、「新型コロナウイルス」の影響による経済活動の低迷によるものであろう。

2020年度第3四半期に好転しているのは、年末にあたり人の動きが活発になったことによる。

「新型コロナウイルス」による世界的な経済の停滞は、ワクチンの接種の広がりにより、徐々に回復されるであろう。

以上

(参考資料) (2021/3/31付日商L O B O調査結果より抜粋資料)



業況DI (※DI = 「好転」の回答割合 - 「悪化」の回答割合)

	2020年	2020年			2021年			先行き
	3月	10月			11月	12月	1月	2月
全産業	▲ 49.0	▲ 50.2	▲ 45.8	▲ 46.1	▲ 49.5	▲ 46.8	▲ 35.3	▲ 29.1
建設	▲ 18.6	▲ 25.8	▲ 26.8	▲ 26.9	▲ 27.1	▲ 24.9	▲ 18.4	▲ 26.9
製造	▲ 51.7	▲ 63.9	▲ 54.1	▲ 53.4	▲ 48.5	▲ 44.8	▲ 33.6	▲ 21.2
卸売	▲ 53.1	▲ 47.8	▲ 39.0	▲ 45.3	▲ 49.0	▲ 47.7	▲ 35.0	▲ 25.8
小売	▲ 58.9	▲ 45.3	▲ 41.5	▲ 45.5	▲ 49.5	▲ 45.8	▲ 33.9	▲ 33.6
サービス	▲ 55.8	▲ 57.2	▲ 56.1	▲ 53.0	▲ 64.7	▲ 63.0	▲ 48.5	▲ 35.7